

シュメール語は日本語，アルタイ諸語と同系か：その3 形態・統語の比較（完）

板橋，義三
九州大学言語文化部

<https://doi.org/10.15017/5375>

出版情報：言語文化論究. 6, pp.69-79, 1995-03-10. 九州大学言語文化部
バージョン：
権利関係：

シュメール語は日本語、アルタイ諸語と同系か

—その3 形態・統語の比較(完)—

板橋 義三

h. 動詞

[1] 動詞の形態

シュメール語の動詞はアルタイ諸語のそれと同じように変化はないが、接頭辞や接尾辞がつくことにより、その意味を変化させていく。接頭辞や接尾辞を使用するのはより新しい傾向であるとしており、いくつかの接頭辞は文中に前出した部分の重複させる機能をもつ (Ahlberg 32) :

例 いえ 神のため わたし それ 彼の
ため 建てる

上の例で下線の部分があるがその重複した部分であり、それが接頭辞によってなされるが、この文の意味はこの接頭辞がなくても全く問題ないとしている。が、本来はなにか統語的機能がなかったはずであり、その点が後に化石化したと考えてよい。Ahlberg は接頭辞や接尾辞の使い方に矛盾が多く見られるので、特に接頭辞はアッカド人などの外国人の書家によるその外国語の要素を接頭辞として取り入れた文意を明確にするための用法ではなかったと考えられるとしている。従って、これらの接頭辞は少なくとも借用であろうと見做していることがわかるが、下記に見るように、接頭辞や接尾辞は動詞の形態論の中枢をなしていると考えられるので、必ずしも借用であると考えられない。

Ahlberg は動詞そのものについてはほとんど述べていないが、吉川 (言語学大辞典 1991, 228)によると、シュメール語はアスペ

クト的言語で完了相と未完了相の対立が見られ、若干の動詞は完了相と未完了相で異なる独自の語根を持ち、その以外の動詞は常に完了相を表すという。またこれらの動詞には未完了相を語根の重複によって表す動詞や未完了を表す形態素-eを付加する2種類があり、さらに少数の動詞には動作主や目的語の数の区別によって異なる語根を取るものがある。このように動詞の形態が色々存在するところを見ると、本来のシュメール語の動詞の形態は少数の動詞の形態が残存したものであろうと考えられ、規則的な変化を示す動詞形式は二次的に発生したものが多。従って、完了相と未完了相で独自の語根をもっていたかまたは動作主や目的語の文法数により異なる語根を持っていたかのどちらかの形式が本来の形式ではなかったらうかと思う。しかし、どの形式を本来の形式にとろうとも、基本形は完了形であり、未完了形はそれからの派生と考えられるので、この根本的な点においても古代日本語とは全く異なる。動詞の形態に関する記述が欠如しているのはどうしたことであらうか。

シュメール語の接頭辞には4種類あり、モダル、活用、格表示、代名詞表示であり、この順に動詞に付加されるが、格表示の接頭辞を除いて、どれも重複機能をもたないとしている。接尾辞には動詞の直後に来るもので、未来時制、代名詞表示、統語表示、後置詞と呼ばれる接辞があり、後置詞は形態的には接頭辞に対応するものであるが、類似した機能

や異なった機能を持つとしている。また、Ahlberg は接辞を接頭辞と接尾辞の 2 種類に大別しているのも特徴と考えられる。しかし、吉川（言語学大辞典 1991, 228-9）はファルケンシュタイン（A. Falkenstein）の分類法を用い、これらの接辞は接頭辞、前接辞と接中辞に分類できるとしている。接頭辞が定動詞に不可欠である要素であるが、その点に注目し、接頭辞の前に置かれる接辞は前接辞と呼ばれ、否定、禁止、断定、願望などを表すモダル表現の接辞であり、接頭辞と動詞語根の間に挿入される接辞は接中辞と呼ばれ、与格表示、空間表示、代名詞表示を表す。また、接頭辞には mu-, i-などの活用接頭辞、im-などの来辞法や去辞法を表す接頭辞、接中辞をとらないことを特徴とする接頭辞 al-などがある。従って、シュメール語の接辞と呼ばれるものには少なくとも 3 種類あり、その機能が異なっていることは当然のことながら、統語的機能も異なっている。特に古代日本語と比較するとき、動詞の形態が類型論的に異なっていることよりもそれぞれの形態素が対応するような機能を備えた接辞や動詞群が存在しないという点が大切であり、1 つ 1 つ Ahlberg の接頭辞や接尾辞を考察して行くことにする。

[2] 接頭辞

グループ 1

(a) 否定辞 nu/la (ba の前) /li (bi の前)

まず、シュメール語の否定辞の異形態 la/li の形態変化の説明が全くなく、本来の形態が nu であると初めから仮定し、論を進めている。例えば、ツングース語の語彙にツングース祖語が * lami 「海」であり、その反射形に nami という語があるが、このような変化を考えるとシュメール祖語として * lu も立て得る。そして、二次的な発達としてその直後に -ba/-bi が来たときは、母音の同化により否定辞の母音だけが変化したと考えられる。

またその他の環境では子音が /l/ から /n/ に変化したと考えることもできる。

古代日本語には zu と nu の異形態があるとしているが、活用形では未然形と命令形が存在せず、nu は連体形、ne は已然形を表すのみで、zu や zi などの否定辞とは形態的に全く異なるので、この 2 つの形態素は全く異なった意味をもっていた可能性がある。即ち、zu や nu は本来活用がなく、従って助動詞として存在していたのではなく、ある種の否定接辞として存在し、さらに nu は補充形であった可能性が考えられるのである。故に、zu と nu の 2 形態が存在したと考えられるから、古代日本語の zu の比較も行わないと否定辞全体を比較したことにはならないので、その比較も考慮すべきであった。

(b) 否定辞 bara

シュメール語ではこれは純粋な否定辞であり動詞の前に一般に置かれる。一方、古代日本語では mare は本来は mara であり、その後名詞や助詞が来たりするが、動詞を否定することはない。古代日本語では動詞が助詞などの前にくるときは連体中止法の形態しかこないものであり、体言と用言に付く品詞が異なっていたので、mara は体言のみにしかつかないものであった。従って、シュメール語の bara は動詞しか付かず、体言には付かないので、形態上類似していても本来同じ機能を持っていたとは考えられない。

(c) 禁止辞 na

これはシュメール語では接頭辞であり禁止を表す。それに対して古代日本語では動詞の終止形（ラ変は連体形）に接尾する接尾辞であり同様に禁止を表す。また、『な+動詞+そ』という接頭辞の形態をとるのは奈良時代の終わりからであり、na は本来は接尾辞であったと考えてよい。ここで注意すべきことはシュメール語や日本語などの膠着語の言語における 1 音節の語の比較の場合は偶然の一致により形態的に一致する可能性が高くなるという

ことである。機能、形態的には一致するので同源性も考えられなくもないが、ただ、この接辞だけが一致したところではたしてこの接辞は同源だというのは早計であろう。即ち、他の接辞も同様に同源だと言えるのであれば、この接辞の同源性も否定できなくなるだろうが、この接辞一つではそれを証明することは不可能であろう。さらにこの na はシュメール語でも現代日本語でも強調の機能をもつというが、これはこの同じ na ではなく、形態的には同じだが機能的には本来異なっているものであると考えられるので、ここでの比較は適当ではない。また、現代日本語との比較をしている点も問題である。

(d)使役／依頼辞 ha/he/hu

シュメール語ではこれは動詞に付加する接頭辞であり、依頼や命令や願望を表す。これと比較している古代日本語は ha で提題の接尾辞であり、シュメール語のそれと同様に条件の提示を表すこともある。ここでの根本的な誤りは表記、音声上の問題で、古代日本語では /ha/ は存在せず、/pa/、/fa/ または /ba/ であったはずで、これは一般に已然形を表す /ba/ が弱化したものと考えられる。また、この古代日本語の ha は動詞と共に使われることはなく、使われる場合は連体中止法の場合であり、体言と考えられるのでその場合も全く問題はない。上記(c)で見たように、体言と用言に付加されるものが異なるので、機能としては異なると考えてよい。従って、この比較はあまり意味をもたない。

(e)その他の接辞

この他にシュメール語の sha/shi/she/shu, u, iri, nush/nish/nesh などを古代日本語の shi, u/e, ari+V, moshi と比較しているが、シュメール語のこれらの接辞の機能が不明なため、この比較はただの憶測に過ぎない。

グループ2 (動詞活用)

(a) i

シュメール語では動詞の直前に i を付加することがあるが、その機能や意味についてはまだ判明していないので、これに対応すると思われる古代日本語に i を上げているが、あまりこの比較は意味をなさない。この例文の全く示されていない。

(b) ga

Ahlberg はシュメール語には動詞接頭辞の ga があり、その異形態には nga (g は鼻音?) があるとしている。その意味は「もまた、それで、さらに、そして」であるとしている。これに対して日本語では接続助詞の「ga」がその同源語として挙げてあるが、この [ga] は本来は格助詞であり、連体形に付いた。この接続助詞としての機能をなすようになるのは10世紀以降であり、従ってこの接続助詞とシュメール語のそれとの比較は成立しない。

グループ3 (格)

この節ではこれまで見て来た格助詞の比較のまとめであり、特にここでは付け加えることはない。

グループ4 (代名詞)

この節でも4項目を挙げているが、そのどれもシュメール語では意味機能がはっきりせず、またそれに対応する日本語はまだみつからないようである。

[3] 接尾辞

グループ1 (未来)

(a) ede/eda (m)

このシュメール語の接尾辞は一般に未来を表すが、(m) が付加されたときには「に違いない」の意味で使われるという。また、語頭の e- は母音に接続するときは脱落するので、本来の接辞は de/da であるという。この同源語として日本語の ramu を挙げているが、これは rasi との比較から *ra-mu と区切る

ことができ、本来の機能は現在の事態を推測することにあつたと一般に考えられるので、シュメール語の意味とは異なる。さらに古代日本語における意志、推量、予想を表す助動詞には *mu* があり、これは当然ながら未来や未定の事態や動作を表す未然形の動詞または助動詞に付いた。従って、古代日本語では未来に関する助動詞は Ahlberg のいう *ramu* ではなく *mu* だけであつて、ここでの比較は意味をなさない。さらに例文を一例も挙げていないのは不審を抱かせる。

グループ 2 (代名詞)

シュメール語の代名詞は一对の人称を表す接尾辞となっているが、本来の意味・機能は異なる段階の尊敬を表すものではないかと Ahlberg は述べている。しかし、これに対応する日本語の同源語と考えられる語は示されていない。また二つのセットの違いは何なのかは全く明らかではない。

グループ 3 (直接話法/非現実)

このグループでは直説話法を示す *eshe* が、非現実を表す *gishen* があるが、そのどちらもその機能が明白ではない。また日本語の同源語はない。

グループ 4 (後置詞)

シュメール語の後置詞は格助詞のように名詞や代名詞に接尾されると同時に動詞の接頭辞と同じであるという。特に動詞に接頭される時は異なった機能をもつという。下記のように主な日本語に同源語と考えられる語をもつものだけを見て行くことにする。

(a)時/たら, ば

シュメール語の *ra* と日本語の「たら」の *ra* とを比較しているが、これは現代語の用法であり、古代日本語にはこの用法は存在しなかった。即ち、これは助動詞「たり」の未然形であり、この「たり」は助動詞「つ」の連

用形である「て」と動詞「あり」が融合してできたものであつて、*ra* は時を表す接尾辞ではない。要するに、このシュメール語の接尾辞 *ra* とは比較は不可能であることを示している。

シュメール語には時を表す *ni* があるが、これが日本語の時を表す *ni* と同じであると言う。しかし、この比較は単に日本語に *ni* の用法の一つを取ったに過ぎず、「に」には他にも色々あり、それらの用法をすべて取り上げ比較しないと *ni* の本来の同源性を示すことはできない。この日本語の *ni* はツングース語の沿格の *li* の異形態であると考えられる。

条件を表す古代日本語の *ba* と比較するシュメール語の *ba* はほとんど同じ用法をもつという。この日本語の *ba* は *ha* にも変化し、それは万葉仮名によって明らかになっているが、その *ba* の機能は強調であつたと考えられる。従って、統語的にも意味的にも異なっているので、シュメール語の *ba* との比較は無意味である。

b と *d* の交換を基本にしたシュメール語の *gude* と日本語の *bu*「様に振る舞う」が同源であるとしているが、シュメール語の *-de* は接続助詞とし、日本語の助動詞「つ」の連用形「て」に相当するという。しかし、本来、これらはそれぞれ接続の接尾辞と助動詞である。しかも、日本語のそれは無声音の *te* であり、*de* は *te* からのその直前の音節中の子音が有声音であることによって有声化したものであり、古代日本語ではその直前の音節に有声子音が存在しても有声化して *de* になることはなかったので、*de* は本来の音ではない。従って、この両者は起源を異にしており、比較はできない。また、シュメール語の *gu* と日本語の *bu* の比較ではまずシュメール語の所有代名詞とされる *gu* の本来の意味・機能が全く理解されていないので、これと日本語の動詞の語根 *bu-* の比較は早計である。と同時に、もしこの *gu* が元々所有代名詞であつたなら、

特にそれと全く品詞を異にし意味も異なる bu とは比較がなされても、同源ではないことを証明するばかりである。

シュメール語と日本語との語頭音は d と y の対応があると Ahlberg は主張しているので、dagude と yagu が対応するという。しかしながら、日本語の yagu という語は古代にも現代にも方言を含めて存在していない。この語の出典が示されていないので、どの方言に存在しているのか分からない。語構成から考えると、シュメール語では da-gu-de であり、da は「を伴って、と共に、で」を表すとしており、また de は接続助詞とするので、この語の主要部は結局 gu と言うことになる。それに対して日本語では ya-gu であろうが、それぞれの意味・機能は不明である。また日本語の語全体の意味は 'appearance' であるとしているが、この語自体が明らかでないので、不明である。

Ahlberg はシュメール語の damude と日本語の tamu を比較しているが、Ahlberg によれば、上述のように、damude は da-mu-de と分解され、順に「で」+主要部+接続助詞と分析される。これに対する tamu は語構成ははっきりせず、シュメール語のその主要部との比較ができない。またその意味は 'just (i. e. arrived)' であるとしているものの、この語自体の出典が示されていないために、その存在そのものが危ういのである。従って、それとの比較はこの時点では早計といわなければならない。

dani はシュメール語と日本語の両語に存在すると述べているが、シュメール語の dani の意味を理解するために、日本語の dani の意味を利用し、例文の解説を試みている。しかし、これが可能な時というのはシュメール語と日本語の同系性が証明された時だけである。これはシュメール語の dani の機能がよくわからないことを暗示している。

シュメール語の dabi は日本語の tabi 「回

数、度」に対応するという。ところが、日本語の tabi の本来の意味は「旅」であつたろうと考えられているが、それはひとつには万葉集などの古い用法では「回数」という意味で助数詞として使われた。また、南フランスでは voyage が「旅」の意味ではなく「回数、度」の意味で用いられるようになったり、「旅」を意味するドイツ語の Reise が同じように「回数、度」を意味するようになったことなどを考え合わせると、日本語の「旅」もまた「度」に派生して行った可能性も非常に高い（時代別国語大辞典、上代編、437頁）。またシュメール語の dabi は上述の tamu の曲用形、tami と比較できるとしているが、はたしてこの日本語の tami が存在したのかがまず疑問になるし、もしこの語が「旅」からの派生語であるなら、この比較はどちらも不可能である。

(b)後（で、に）/時

ta がシュメール語では時間的用法として使われているが、これと同源として日本語の ato 「後」と比較している。この ato は本来空間的用法の「跡」から時間的用法の「後」に派生したものであり、従って、早期古代日本語にはこの後者の用法が存在しない。Ahlberg の言う用法は後者であり、シュメール語とは比較できない。さらに悪いことには「食べた後で」のように現代語の用法を示してその用法をシュメール語のそれと比較しているという基本的な方法論的誤りを犯している。

(c)から（理由）

シュメール語には理由を表す三つの接尾辞 ak a, ak esh (e), esh (e) があり、三つ目の接尾辞は二つ目の接尾辞の ak が脱落した形であるとし、これらを古代日本語の koto 「理由」と比較し、koto は aku から発達したものであると述べている。しかし、古代日本語には理由の意味での koto は存在しない。また aku という形態素から発達したものであるというが、aku という形態素については古代日本語には存在した痕跡が見られない。どのよ

うな音韻的形態的変化過程を経て aku から koto に変化したのかも分からない。またこの形態素は本来何であったのかということに関する説明は一切ない。どうして koto との関係が全く明らかでない aku がシュメール語の ak a と比較できるのかということについても全く説明がないので、この比較は推測の域を脱しない。

Ahlberg は日本語の方言形 ke/ke はシュメール語の ke esh の下略ではないかと推測している。これは明らかに「けれ」または「けに」の下略であって、シュメール語とは何の関わりもない。

(d)まで

これを表すシュメール語はひとつの形態素ではなく、統語的な存在であり、「動詞 + a + a / (e) she」で表す。これと比較可能な統語的なものは日本語にはないが、方言に「せー」というのがあり、これは「まで」という意味をもたないが、方向を表す接尾辞として存在していることで、シュメール語の (e) she と比較を試みている。この方言形はその異形態と考えられる方言形「さ」と同源であると考えられる。「逆さ」の「さ」と「逆さま」の「さま」とは同じところから、本来は「さま」という形態素があり「ま」が脱落したという説と逆に「さ」が本来の形で「ま」という接尾辞が添加されたという説の二つがある。どちらにしてもこの「さ」は様子や状態を表すと同時に方向の意味ももち得ると考えられる。「さ」が本来の音であり、「せ」は発達形であろうということと空間的な機能しかないということから、このシュメール語との比較は成立しないであろう。

(e)動詞 + a + ri

このシュメール語の構文の意味や機能というものは学者によって異なっているので、Ahlberg はここでも日本語の類似構文の機能を借用しこの構文の解釈をしようとしている。即ち、日本語構文は「動詞 + ari」から「動詞 +

eri」という構文に発達し、これがさらに eri の e が脱落して、最終的に ri になったと説くが、その根拠は何もない。実際には、ari の直前の動詞の活用形によって ari の語頭の母音が融合したもの（たとえば、「けり」は助動詞「き」と動詞「あり」の融合したもの）と考えてよい。従って、これは Ahlberg のシュメール語との比較を念頭においての解釈であろう。とにかく、このシュメール語の構文の意味が不明であるから、日本語との比較は早計である。

(f)動詞 + gin (ような)

これについては前述してあるが、最も問題なのはシュメール語の gin と古代日本語の gena の音節の区切りが大きく異なることである。即ち、gin は gi-n とは分解できず、またそれに対して gena は gen-a とは分解できず、ge-na であることから、形態的にこの両者が類似していても本来異なるものであることを暗示している。

[4] シュメール語の従属形式

これは基本的には修飾形式と考えてよい。英語のような関係代名詞はなく語順でもって修飾関係を表す。Ahlberg の例文を挙げると、次のようになる。

1. inim duga 話されたその言葉
 2. an inim duga その言葉を話したアン
 3. inim an e duga アンによって話された言葉
 4. inim duga an a アンの話された言葉
- an: 神の名前 inim: 言葉 duga: dug-(話す) + a e: 主格格助詞 a: 所有格格助詞

この例文から分かるように、能動態(例2)と受動態(例3)の形態論的区別はなくその文の意味がその態を決定し、その修飾形式も動詞の活用形で表すのではなく、語の順序で表している。形態的にまた統語的に日本語と

は非常に異なる。即ち、能動態も受動態も動詞には全く変化がないので、主格や所有格になる名詞と格接尾辞やその他の名詞の位置によって決定され、話者の視点はあまり重要ではないようである。それに対して古代日本語では動詞の変化形によって態を決定していたので、この点は大変異なる。Ahlberg も認めるように、シュメール語と日本語の間にはこの点に関して言えば、全く共通するものはないと言える。

[5] 存在動詞

シュメール語の存在動詞の語根は me- であり、この形態は人称と数によって異なる。

一人称単数 men 一人称複数 mende/menden

二人称単数 men 二人称複数 menzen

三人称単数 me 三人称複数 mesh

これらの語構成は Ahlberg のいうように me- という語根に人称代名詞の接尾辞が付加されたものと見ることができる。この語根は琉球語の「行く／来る／いる」などの尊敬語 me- と比較されているが、この琉球語は本来 mee「前」という名詞から発達したもので、それが meewikiga「殿方」などの接頭辞や「様」を表す接尾辞となり、それと同時に抽象名詞化したと考えられる。これは Ahlberg のいうような動詞ではなく、「行くこと／来ること／いること」という尊敬名詞であり、シュメール語のそれとは統語的位置が自ずから異なる。従って、形態的類似が存在しても、それは偶然の一致を免れない。

[6] 動詞 ak「する」

このシュメール語の動詞は名詞や動詞に付加し、名詞は動詞化し、動詞は本動詞化する役割をもち、Ahlberg は ak の a を繫辞母音で語根は k であろうかと疑問に思っている。

この同源語を日本語の補助動詞-ku と比較しているが、この語はロイ・ミラーの考えに基づいている。その例として aru/ari「足／

脚]+ku「する」は「歩く」という意味になるとロイ・ミラーの例を引用している。また、この-ku は上記の aku という Ahlberg の主張する動詞からの派生であると述べているが、上述の通り、aku という動詞自体存在したのかどうか疑わしいのであって、それから-ku が派生したということに至っては、全く推測の域である。従って、この比較はあまり信憑性がないと考えられる。

[7] 命令

シュメール語では命令は動詞の語根のみか、またはそれに接尾辞 e (ほとんどの場合) / a / u (時折) をつけるかのどれかでもって表す。日本語の命令形の接尾辞-e はシュメール語の接尾辞 e を添えるという形成法と同じであると Ahlberg は述べているが、まず問題になるのは命令形だけがどうしてシュメール語と日本語では同じなのかということである。即ち、もし両者が同系であるならば、この活用だけが同じであるはずはなく他の変化形も同じのもがあっても良さそうであるが、実際には存在しないところを見ると、ここでみる形態的な類似性というのは偶然の一致に過ぎないのではないかと考えられる。また古代日本語の四段を除いた命令形はほとんどが -eyo / -iyo でおわり、これに対応するシュメール語が存在しないことや逆に日本語でもシュメール語に対応する命令形(上述の例や ab という形態素と動詞に添える方法など)がないものもある。それらを総合すると、ここでいう両者の e という命令形態素の同一性はただ単に両者の同じ部分を取り上げて、それだけを強調し、他の異なった部分は無視してしまうという方法であって、他人の空似である蓋然性がさらに強まる。

[8] 疑問詞

この一部はすでに述べたので、ここでは新しく示されたシュメール語の疑問詞を全般的

に見てみると、そのうちのいくつかの疑問詞に対するその同源語と思われる日本語の疑問詞を挙げているが、そのどれもその裏付けがなく単なる推測にしか過ぎない。

シュメール語		古代日本語
ma	「どこ」	ma (方言)
nam mu	「何」	ramu/namu,namo(東国方言)
ana	「何」	ani/nani
ana/anashe	「なぜ」	nashite/nashike(現代方言) naze/aze(古代日本語)
ana/ana gin	「どのようにして」	—
aba	「だれ」	ma (?)
mena/meda	「いつ」	—

シュメール語の ma は日本語方言の ma と同じであるとしているが、この方言形の発生は不明であると同時に標準語の「どこ」に対応するシュメール語が見えない。従って、この方言形のみを取り上げて比較するというのは方法論としては逆であって、まず先に「どこ」に対応する語をシュメール語に求めるべきであろう。東国方言の namu は nam mu と同じ意味とすると、nam mu は推量を表すことになり、「何」とは異なるし、本来 ramu であると考えられるから、nam mu とは比較できない。方言形の nashite は naze-shite の ze が脱落したものと考えることができるから、本来は naze「なぜ」+shite「『する』のて形」であったはずである。それに対して、シュメール語の anashe は ana-she のように分解できたとしても、それぞれが日本語の naze と shite に対応しないのである。要するに、この比較は信憑性が全くない。その他の疑問詞に関しては比較すべき日本語がないので、問題外である。

[9] 複数

複数シュメール語でも日本語でも強調以外の時は使われない。また複数を表すのに一つはその語の反復、もう一つは特別な接尾辞の添加の二つがある。前者は双方ともに共通

する形成方法ではあるが、これは他の多くの言語にも同じように見られる方法であり、同系性を示すものでは全くない。またこの形成方法だけではなくその形態素に共通性があるのかどうかをもっと重要である。その点に関しては全く言及がない。

二つ目の形成方法は非常に一般的であって、その比較し得る接尾辞はシュメール語の (e) ne と日本語の -re であると述べている。ここでもロイ・ミラー (1971: 169ff) の kore/sore/are などの -re は複数を表す接尾辞であるという主張を引用しているが、これはモンゴル語や満州語などに見られる接尾辞であって複数を表す接尾辞ではない。またこれらはすべて指示代名詞であり Ahlberg のような人称代名詞ではない。ko/so/a は自由形態素であるが、kore/sore/are とは必ずしも意味が同じではないから、同一視はできない。このような基本的な問題の他に、日本語では r と n の交換を介して -re とシュメール語の (e) ne と比較できるとしている。しかし、これらの指示代名詞においてこの交換があったという証拠はないので、この比較も推測に過ぎない。

[10] 数字

Ahlberg はこの項が最も弱い点だと認識しているが、事実、数字の比較ではほとんど同源と思われるものはない。印欧語の同系が証明されていても、数字に関してはその同源ではないものがあり、例えば、古代ギリシャ語とゲルマン諸語を比較するとそれがよく分かる。これは従って数字は借用可能であるということの意味し、同系を示す基準にはならない。

§4 結論

これまで音韻のレベルから形態・統語のレベルまで主に Ahlberg の比較を通して見て

来たが、方法論上の根本的問題はいくつか見いだされ、それは指摘した通りである。音韻のレベルではシュメール語と日本語に表面的には母音、子音共に音韻対応があるように見えるが、事実、形態論の比較により母音の数や音価が異なり非常にばらつきが多く、音韻対応の法則はほとんど成り立たないと見てよいことが分かった。

形態・統語のレベルにおいてはほとんどの語に問題をはらんでおり同源と思われるものではなく、偶然の一致と思われるもの、分析の誤りによるもの、知識不足による語彙の解釈の誤りによるものなどが目立った。こういった誤りを排したうえで、音韻対応が成り立ち、それが形態論まで貫徹し、形態・統語論でも形態素が対応するのであれば、これは間違いなく同系であると言える。しかしながら、これまで見て来たところではその蓋然性はほとんど無いと言わなければならない。

近い将来シュメール語の膨大な資料を十分に生かした辞典が英語で出版されるが、そういった資料・文献を基に綿密な研究ができるならば、現在よりもっと詳しく日本語との比較研究が可能になるであろう。将来そういった研究ができるようになれば、シュメール語の系統関係も明らかになる日が来るかもしれない。

参考文献

(和文)

- 1 李基文, 1983, 『韓国語の形成』成甲書房
- 2 板橋義三, 1990, 「琉球語の位置・方向格接尾辞の起源について(1)」『言語研究』No.98 三省堂
- 3 板橋義三, 1991, 「琉球語の位置・方向格接尾辞の起源について(2)」『言語研究』No.99 三省堂
- 4 大野晋, 1974, 「岩波古語辞典」岩波書店
- 5 大野晋, 1980, 「日本語の系統」『現代の

エスプリ別冊』至文堂

- 6 高楠順次郎, 1944, 『知識民族としてのシュメール族』共典出版
- 7 東條操, 1951, 「全国方言辞典」東京堂版
- 8 中本正智, 1985, 『日本語の系譜』青土社
- 9 安本美典, 1990, 『朝鮮語で「万葉集」は解読できない』JICC 出版局
- 10 吉川守, 1991, 「シュメール語」『言語学大辞典, 第二巻』三省堂
- 11 ———, 1963, 「沖縄語辞典」大蔵省印刷局
- 12 ———, 1985, 「時代別国語大辞典上代編」三省堂

(欧文)

- 1 Ahlberg, Roger, 1991, "Sumerian and Japanese", Chiba: Japan English Service
- 2 Ake, Sjoberg, (ed.), 1984, *The Sumerian Dictionary*, Vol. 2 Philadelphia: The University Museum
- 3 Benzing, Johannes, 1955, "Die tungusischen Sprachen Versuch einer vergleichenden Grammatik", *Abhandlungen der geistes- und sozial-wissenschaftlichen Klasse, Akademie der Wissenschaften und der Literatur*, Mainz II
- 4 Boisson, Claude, 1987a, "Quelques ressemblances lexicales entre sumerien et dravidien", Manuscript
- 5 Boisson, Claude, 1987b, "A conjecture on the linguistic affiliation of Sumerian", Manuscript
- 6 Boisson, Claude, 1988, "The Sumerian pronominal system in a Nostratic perspective", Manuscript
- 7 Bomhard, Allen, 1984, "Toward Proto-Nostratic: A New Approach to the comparison of Proto-Indo-European and Proto-Afroasiatic", *Current Issues in Linguistic Theory*, Vol. 27, Amsterdam: John Benjamins

- 8 Bomhard, Allen, 1986, "Common Indo-European/Afroasiatic Roots: Supplement I", *General Linguistics* 26/4: 225-257
- 9 Illic-Svityc, V.M., 1971, "Opyt stravenija nostraticeskix jazykov (semito-xamitskij, kartvel'skij, indoevropejskij, ural'skij, dravidskij, altaiskij) 1-3", Moskva: Nauka
- 10 Itabashi, Yoshizo, 1988, "A Comparative Study of the Old Japanese Accusative Case Suffixes wo with the Altaic Accusative Case Suffixes", *Central Asiatic Journal* No. 32: 3-4, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- 11 Itabashi, Yoshizo, 1991, "The Origin of the Old Japanese Lative Case Suffix *gari*", *Ural-Altäische Jahrbücher Neue Folge* Band 10, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- 12 Itabashi, Yoshizo, 1991, "The Origin of the Old Japanese Genitive Case Suffixes *n/nö/na/ŋga and the Old Korean Genitive Case Suffix *i", *Central Asiatic Journal* No. 35: 3-4, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- 13 Itabashi, Yoshizo, 1993, "A Comparative Study of the Old Japanese and Korean Nominative Case Suffixes *i* with the Altaic Third Person Singular Pronouns", *Central Asiatic Journal* No. 37: 1-2, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- 14 Menges, Karl, 1968, "The Turkic Languages and Peoples: An Introduction to Turkic Studies", Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- 15 Miller, Roy, 1971, "Japanese and the Other Altaic Languages", Chicago University Press
- 16 Pedersen, A., 1962 "The Discovery of Language, Linguistic Science in the Nineteenth Century", Bloomington: Indiana University Press
- 17 Poppe, Nicholas, 1955, "Introduction to Mongolian Comparative Studies", *MSFOu* 110, Helsinki
- 18 Poppe, Nicholas, 1964, "Grammar of Written Mongolian", *Porta Linguarum Orientalium*, neue serie I, Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- 19 Poppe, Nicholas, 1965, "Introduction to Altaic Linguistics", Wiesbaden: Otto Harrassowitz
- 20 Tekin, Talat, 1968, "A Grammar of Orkhon Turkic", Uralic und Altaic series, Vol. 69, Bloomington, Indiana University Press
- 21 Thomsen, Marie-Louise, 1984, "The Sumerian Language", *Mesopotamia* 10, Copenhagen: Akademisk Forlag
- 22 Von Gabain, A., 1974, "Alttürkische Grammatik", Wiesbaden: Otto Harrassowitz

Is Sumerian genetically related to Japanese as well as Altaic ?

—Part 3 : Morphological and Syntactic Comparison—

Yoshizo Itabashi

This paper attempts to investigate the possibility of the genetic relationship among Sumerian, Japanese and Altaic mostly by reviewing the book entitled *Sumerian and Japanese* by Roger Ahlberg.

On the phonological level, we do not find any clear correspondences in vowels and consonants between Sumerian and Japanese.

On the level of morpho-syntax, there are many mistakes and wrong analyses in the book, so his claimed probable cognates including grammatical patterns are not convincing, even though there are many seemingly similar forms and meanings. What is more, since cognates are not found on the morpho-syntax level in those languages, let alone in his book, this fact, on the contrary, gives support to our claim that phonological correspondence between Sumerian and Japanese are merely a fiction. Therefore, we can safely conclude that there does not appear to be any genetic relationship among Sumerian, Japanese and Altaic.